

三月の大空襲

——言問橋からとび下りて九死に一生、
母ら四人を失う——

●和泉三丁目

中村 かつ子

(昭和六年生まれ)

下町が焦土と化した、昭和二〇年三月一〇日未明の大空襲の時、浅草観音裏の馬道に住んでおりました。

警防団（隣組長が集まって、町内に警備に当たる詰所）から父が帰宅、すぐにリヤカーに荷物を積み「隅田公園に逃げよう」と、家族七人が家を出ました。中学三年の兄が一人残りました。

聖天様の方向へ、電車通りに出ましたら、空は四方八方真赤で強風が地面を滑るように吹き巻き、父のリヤカーの後を、姉と押しながら、やっと言問橋のたもと左側に来ました。自転車、大八車、リヤカーに、荷物を背負った人で、大変でした。真中で男の人が「橋を渡りなさい」と大声で叫んでいました。

父は荷物が有るので、ここ「隅田公園にいる」と、母と弟二人、義姉の四人を先に行かせました。右側の家が焼け始め、トタン板がとんで来ました。私も姉と、父を残して渡り始めました。みんな途中で荷物を捨て、先へくと渡りました。もう少しで橋を渡り切れるところまで来ましたが、一ぱいの

人と荷物で、もう先へは進めません。橋の欄干にしゃがみ込んでしまいました。

橋の真中の荷物に火が付いて燃え始めました。姉が「こんな所にいたら焼け死んじゃう!!」と言って、立ち上った途端、姉の防空頭巾に、豆粒位の火の粉が付き、燃え始め、姉は橋からとび下りてしまいました。私も立ったら、すごい熱風と同時に、顔を両手で覆いました。ただ熱くて、無我夢中で私もとび下りました。ほんの一瞬の出来事でした。

幸い、とび下りた所が、ちょうど桜並木道で、五メートル先には石段がありました。あと三メートル後には川が流れており、川の中にとび下りていけば溺死しておりました。橋の下で避難しております時、何ともいえない臭いで、人々が「今橋の上で荷物と人が燃えている」と言っておりましたが、私も姉も両手の火傷が水泡となり、一〇本の指は爪ごと取れて、垂れ下がってしまいました。ただぐく痛くて、恐怖と、おののきの中、じっと夜明けを待ちました。

白じらと明け始めると、人々は橋の上に出ました。姉を見

ると、顔は煤すすで真黒に、目も鼻も見えない程に腫れ上がり、髪の毛も焼けちぢれ、顔と両手に火傷、足をひきずってしまいました。私のリュックも焼け焦げて、靴は片方脱げておりました。

私たちも橋の上に出ました。そこは、この世のものではありません。衣服はすっかり焼けて、裸の泥人形の様相の焼死体が、るいるいと横たわっており、足の踏場もありませんでした。姉と「南無阿弥陀仏」を唱えながら、足元をたたく仏様を踏まないようにと、かきわけくやつとの事で橋を渡り切りました。橋の上を見渡す余裕はありませんでした。

そのまま浅草小学校へ避難しました。おにぎり一個を配られました。そのおにぎりを手で持てず、食べる事も出来ませんでした。間もなく、兄が来ました。兄は橋を渡り、向島の牛島神社におり無事でした。「自分が最後に家を出たので、皆、助かっていると思っていた」と、がっくりしました。しばらくして、やつと、父が参りました。鉄兜の下は、顔中包帯と、衣服は焼けちぢれ、裸同然、両手、腕、横腹、すね、足元と、包帯で、身体の七分に火傷を負い、焼け残りの荷物の中から、かいまき布団を拾って着ていました。

誰だか解りませんが、橋の上で、衣服に火がつき、それをむしり取りながら、橋の欄干の外側にぶら下がっていた。と、その時、数人の人たちがぶら下がったが、次々と川の中に落ちてしまい、父だけが一人残り、生地獄を見たとき、は、本当に奇跡としか思えません。橋の上の人は苦しむというより、熱風を息吸った途端、ぱたっと倒れて、そのまま起き上がることが出来ずに、焼死してしまつた、とも

言っておりました。

夕方近く、知人が尋ねて来て、タイヤの無い骨組だけの焼けたリヤカーを拾って来て下さり、それに、父と姉をのせ、皆、飲まず、食べずの放心状態のまま、はだして数時間も歩いて、夜、荒川の四ツ木橋近くの知人宅に御世話になりました。そこで初めて、母が出掛けに、兄に背負わせたリュックの中を開けて見ました。何と先祖の御位牌だけが、全部入っておりました。御守り下さったのでしょうか、唯一人、兄だけが無傷で助かり、私たちの世話をしてくれました。

一夜にして、かけがえの無い母、二人の弟、義姉の四人が焼死し、兄を除いて、三人は負傷、家も焼失、何もかも無くなりました。長兄も外地で戦死し、私たちのため、戦後、必死で生き抜いた父も三二年前、母たちの許へと旅立ちました。

四月には御詣りを兼ねまして、言問橋の上から見渡す兩岸の爛漫らんまんの桜の春は、本当に美しい風情がございます。言問橋、桜橋と、隅田川に、今年で三回目の世界唯一のボートレースが五月四日、伝統の水しぶきをあげ開催されますとのこと。また、夏には花火にと、平和の華舞台として賑わう、今日このごろですが、四七年前、この平和を築き上げるために、悲惨な戦争で尊い多くの犠牲と、悲しみのどん底に打ちひしがれた者のあつたことなど、心する人も数少ないことと思いません。

平和の尊さを語りつくことが、亡き人々への鎮魂歌となり、子孫のためにもこの平和な日々が永久に続きますようにと、心より念じます。

空襲

●下井草三丁目

中村 夫美子

(大正二〇年生まれ)

昭和二〇年四月一四日、焼け出されるまで住んでいた田端は、山の手線が田端を出て駒込の方向にぐうーとまわる高台で、崖の上に住んでいました。田端のたぐさんの線路、尾久の町、遠く荒川の千住大橋の灯も見えるところでした。

一三日の夜は珍しく、工場の人たちは残業がなく、工場は真暗でした。父は信州に疎開のため建物を求めに行き、母は疎開してしまつたら会えなくなると、春日部の小母さんに会いに行き留守で、私と妹と二人きりでした。

夜一時ごろだったと思います。警戒警報がなり、またきた！ と警戒体制に入るため妹が靴で家の中を歩いたら、と言つたので、私はなんとなく、父があつらえて作つてくれた皮靴をはいて、家の中を歩いていました。歩いたために床が汚れたとしても、家が焼けなければその床をふけばすむことでした。そして、なんだか虫が知らせたのでしょうか。妹も二階に靴を取りに行くと、空襲警報がなり、ドーンともものすごい音がしました。私は何か落ちたと思ひ、バケツを持って外に出て、どこですかと大声を出しましたが、カタンという音

一つなく静まりかえって、近所の方々はどうしてしまつたのか、そのこと考えている間もなく、次から次へと、B 29が編隊を組んで飛んでくるのです。防空壕に布団を押し込み、蓋をして、スコップで土をかけるのですが、土はざらざら、ざらざら落ちてしまうので、あきらめました。家の中に入り、タンスを下から開け、シーツに少しばかり残っていた衣類をつつみ、妹に背負わせました。

雪のように火の粉がふりかかるので、玄関の水がめの水を防空頭巾の上からかけ合つて、裏の垣根のしおり戸から崖に降りました。B 29が上野の方から編隊を組んで急降下し、尾久の上で機体の弾倉が開かれると、バラバラ、バラバラと焼夷弾が無数に落ち、真暗な中で、赤い火となり、阿鼻叫喚となります。それはそれは悲痛な叫びが私の耳を通すのです。背すじから鳥肌が立ち、それが繰返されるのです。一面の火の海です。我にかえつて、私は表の通りに出てみました。田端の高台通りは人でいっぱいでした。これは大変と家にもどり、押入れから布団を引っ張り出し、妹とかぶつて崖の途中に

しゃがみ込みました。

さっきの爆弾で山の手線の向こうの三角屋敷の二階家は柱のみ夜空にくっきり浮き出ていました。

しばらく様子を見ていましたが、我が家は無事に建っていますので、「ちよつと見てくるからネ」と妹をそこに残して、崖を登り、また表の通りに出て、田端駅の方を見ましたら、半丁ばかり先きのお寿司屋さん辺りが火になっています。大工のSさんが大八車を空で通り過ぎてゆきました。家にもどり風呂桶に水が張ってあるので、戸棚の中の手にふれるお皿、缶詰などをしずめました。そしてまた表通りに出ましたら、前の赤レンガ造りの二階建精密工場の東端民家から工場に火が入り、レンガ建物の中を火がぐるぐると大きな輪を描いて、一度に窓から、ぼうーつと火をふきました。一瞬の出来事でした。その恐ろしかったこと、無我夢中で妹の元にもどり二人で座り込みました。線路の向こうから、『そこにいる人、危いから逃げなさい』と声がかかります。私どもは崖の途中に幾つか公に造られた誰でも入ってよい防空壕が掘られていて、その赤土の山の谷間にいましたので、運び込んだ荷物を手で赤土をかけ、田端のたくさんある線路に逃げました。我が家がすっかり焼け落ちるのを見ました。

空が幾分白んで来て、崖の上の建物は型が全く見えなくなりましたので、そーつと上って我が家の裏庭にもどりました。防空壕の上に置かれたお釜は蓋が焼け、お赤飯のように御飯が出来ていました。真っ平らになってしまった焼跡に、田端

の駅の方から真赤な大きな太陽が上ってきました。



〈区立郷土博物館所蔵〉

戸籍上で死ぬ

●成田西一丁目

野崎 実

(昭和二年生まれ)

戦争が終わって、既に四十数年になるが、最も心に重く残るのは、昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲のことである。前年の一〇月まで深川森下町（現在、江東区）に住んでいたが、父が病死したので、銀座の姉の家に転居したので、私は生きているわけである。銀座の夜空から、隅田川の方面が真赤に燃えているのを、物干場の上って眺めた。

次の朝早く、走って両国橋を渡り、元の住居にいくと、すべての家が燃えて、人もいない。その廃墟と化した町から、国会議事堂が見える。そこまで建物が無くなってしまったのである。トラックに死人の山を積んで軍人が行く。燃え残った木の片に、「一家で、私のみ生き残った。山形に帰る。秋山某」などと鉛筆で書かれていた。この一晩で亡くなった人命は、一五万とも一八万ともいわれ、今も正確には知ることが出来ない。

それから、一年ほどして、赤錆びたトタンや掘立小屋の建っている深川の町を歩いて就職のために必要な戸籍謄本を取り、深川区役所（現在、深川江戸資料館）にいった。

ところが、私の記載欄には、なんと赤鉛筆で紙面いっぱいの大バツテンである。私は真赤になって「俺は生きているよ」と言った。そして、読むと「昭和二〇年三月一〇日未明、米軍機大空襲のため、焼死。両国国技館附近で死体確認」。その上の両国警察署長の朱印が鮮やかであった。

戸籍係に「野崎実、この私本人です。死亡を取消して下さい。就職のためにすぐ必要です」と、必死になって訴えた。係の人は、あまり驚いた顔も見せず「ああ、森下町二丁目二番地ですか。この附近の人はお気の毒にほとんど、亡くなったので、何かの手違いで、こんなことになったのでしょうか。」「本当に野崎実さんご本人ですね」ときくから、私は「本人です」と答えた。係の人は「すぐ訂正します。掛けてお待ち下さい」。すぐに生きかえることが出来るのか心配で、もし手続だ、裁判所だということになったらどうしようと、本当に悩んだ。

だが一〇分もすると、係に名前を呼ばれて、どきどきしながら近よると、「本当に申し訳ないことです。訂正させて戴き

ました。」と頭を下げ、戸籍謄本を渡してくれた。「やれ、やれ」。私は戸籍の上で生還した。それにしても、父が病死しないで、森下町に住んでいたら、私の家族も九〇%の確率で死んでいた。

竹馬の友のI夫ちゃん、Sちゃん、「大人になったら、お嫁さんにしてね。」と言っていたH子ちゃんも帰らぬ人になった。

焼死とは、どんな苦しい死に方か。いつもやさしい下町のおじさん、おばさんも死人の山となってしまった。毎年、三月一〇日になると胸が痛くなる。

あれから四十数年、敗戦後は、猛烈な軍国主義から、民主主義、民主主義という時代になり、今は、国連、国連という、国連の旗の下では、世界の平和のために、軍事行動を積極的に日本も参加すべきだと、有力政治家が発言している。

だが、戦争は、国際間で行うべきでないといっても、一方が戦争をするのならこちらも応戦すべきで、日本の憲法は理想論だという人も少なくない。しかし、私は全体平和、民族、宗教、経済、領土など、未解決の問題が世界中にあると思う。しかし、戦争しないで解決するには、どうするのがよいかというところが、今、生きている全人類の共通の宿題である。

三月一〇日は平和を祈る日である。

戦争中は、杉並区に住んでいないので、当時の杉並区の戦災体験と同じでないという人もあろうが、東京中、日本中、同じような体験である。



統制経済—戦争—空襲の思い出

●松庵三丁目

長谷川 新吾

(明治三十四年生まれ)

美術造花の製造を独立開業して二年目の昭和六年に関東軍の満州進出が始まって、国内経済事情も異状を感じ始めた。

五・一五事件、二・二六事件、等々物騒な事件、銀行払出し停止令が出されたり、不安な実状がひろがる。

日本軍が中国本土に侵入した。ドイツが欧州で戦端を開いた。昭和一五年にヒットラーの軍隊にフランスが降伏した。

年ごとに報道は拡大して行く。翌年は日独伊の軍事同盟が結ばれ、太平洋戦争は不可避だと報道される。

世界中で一位であった造花の輸出国であったスロバキアとドイツが第一次戦乱で出来なくなつて、オーダーが全部日本に向けられ、好況にあったが、束の間のことであった。

昭和一六年一二月八日朝「南太平洋において米英と戦闘状態に入れり」のラジオ放送。お得意先と戦争が始まったのは万幸休すだが、町会の役員業は、急ピッチに忙しくなる。

隣組長、班長制の強化、灯火管制の指導、防空壕の指導、防空訓練、警防団組織の充実、出征兵士を送る愛国婦人会の結成、私はその軍人総代になった。毎朝のように町外れまで婦

人会の先頭に立って激励の辞を贈った。

貯蓄総代の役で国債割当が来るごとに完全消化で隣組に割当てる。配給制度もますます繁雑になって事務員も増やし、自分の家も商売が出来ないので、町会の事務所に提供した。

警防団長は町会長だが、宮園通りの谷戸小学校に本部を置き、各部の訓練を学校でやった。警防団の総務部長に私が任命されているので、警報が出て出動することに、出動員に一回五〇銭支払うことになっていて、私がカバンに一杯に五〇銭紙幣を持っていた。徴用令が団員に来ると、その団にとって重要な人物と見る場合は、団長に代わって令書に角印を押してやった。

建物の強制疎開令が来ると、日数を決めて取り壊さなければならぬ。この仲町で一〇三軒の指令があつて、今住んでいる家を、しかも新築のきれいな家もある。それを役員総出で壊した。その保証まで私が中野区の嘱託という名目で手続きまで命ぜられた。

東京で初めての空襲、昭和一七年四月一八日、一三機の米

ノースアメリカンB25による東都初空襲があった。この日は私は警防団谷戸小学校本部に詰めていた。淀橋、大久保方面から胴体の色まではっきり判る程超低空で学校の真上を、轟音と早い速度で杉並方向に飛び去った。あっと思う間であった。大久保方面に煙が見えるので、数人の団員と現地を尋ねた。焼夷弾投下で被害家屋二〇軒、罹災者八名。柱にささった機関銃の弾も残っていた。この日の東都内の五か所に及ぶ初空襲で、一家六名が焼死した尾久の例もあり、空襲の恐怖を知る。

四女が生まれるころ空襲がますます激しくなり、我が妻も大きなおなかをして防空壕に入ったり出たり、バケツを下げて雑炊の配給を貰うために並んで、ヒシヤク一杯で一人分の配給量だった。状況が少し落ち着いたようなときは、昭島や拝島まで何かを求めに出掛けるのが妻の役目のようにになったが、妻子の疎開命令が出て、昭和二〇年一月一二日、妻は五人の子供をつれて、新潟へ疎開した。その何日か後の一八日、遂に本土決戦作戦が発表された。三月一〇日の大空襲は本所深川方面が絨毯爆撃で被害甚大であると報じられ、中野警防団も五〇名編成し、私も一緒に菊川橋に行ったが、橋はなくその周囲には特に多くの死体で目も当てられない惨状であった。見渡す限り性別も判別出来ない黒焼き姿、道路を車の通れるだけ整理をするためでも大変な数で、暗くなるまでかかった。母親であろう二人の子供を抱えて上からかぶさるように黒焼きになっているのを見た。この朝の死体は、浅草方

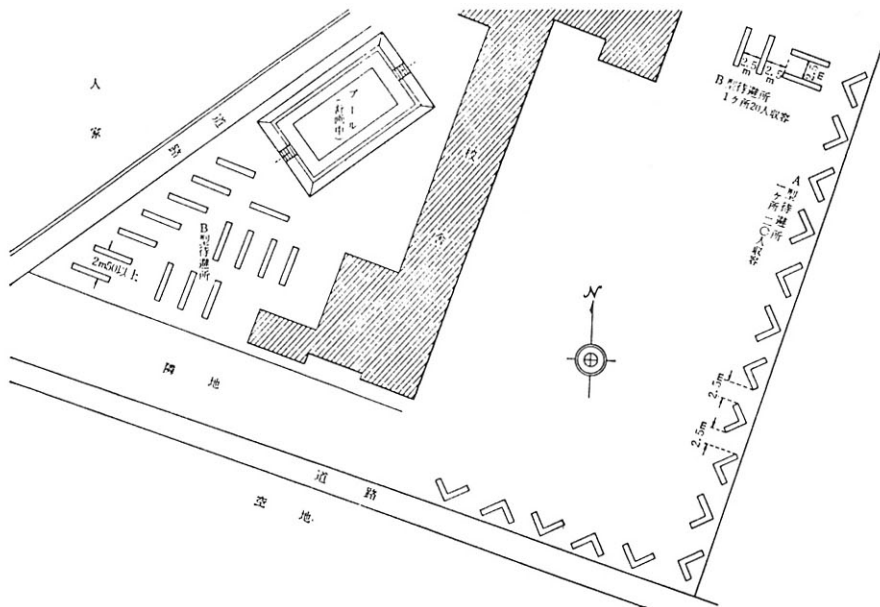
面は四、一〇〇名、本所方面五、九〇〇名、城東方面四、〇〇〇名、深川方面六、五〇〇名、荒川方面三、一九〇名、と発表された。つづいて四月一三日、一四日、一五日夜、一九日夜、二四日と、また艦載機の波状攻撃で延一〇〇〇機により東京は瞬く間に焦土と化した。最後は五月二五日、二百数十機のB29の大編隊で、淀橋、牛込、赤坂、麻布、芝、麴町、京橋、浅草、本郷、板橋、蒲田、荏原、豊島、中野、北多摩、南多摩の一部を残して全焼した。この夜に我が家に飛び込んで祖先の位牌を取り出し、町会で造った防空壕に投込んで警防団本部に行ったが、一人もいなかった。毎日訓練に使った消防ポンプも三台、行儀よく並んでいた。

遠く我が家を見ると、星のごとく降る焼夷弾の中で焰の中に包まれて見えた。中野駅方面に逃げても駄目かと、バケツ一つ下げて考えていると、Tさんの屋敷を教えてください人があった。そこには池がある、そこに沈もうというのであった。防空頭巾に水をしみ込ませ頭から肩まで包み、タオルで顔を包んで水をかけ、鼻の場所だけ沈み上げ、片手で水をかけて火の粉を息をして出来るだけ深く沈み、片手で水をかけて火の粉をふせいだ。時々炎がタオルの面をなでるよう明るく見えたりした。

上町、仲町、城山、高根、上ノ原と焼けてしまった。警防団本部の谷戸小学校も木造なので何も残っていなかった。着ている団服も水を吸って重くなって、着たまま乾かすには時間がかかった。池の面には炭を投げ込んだようにたくさん浮

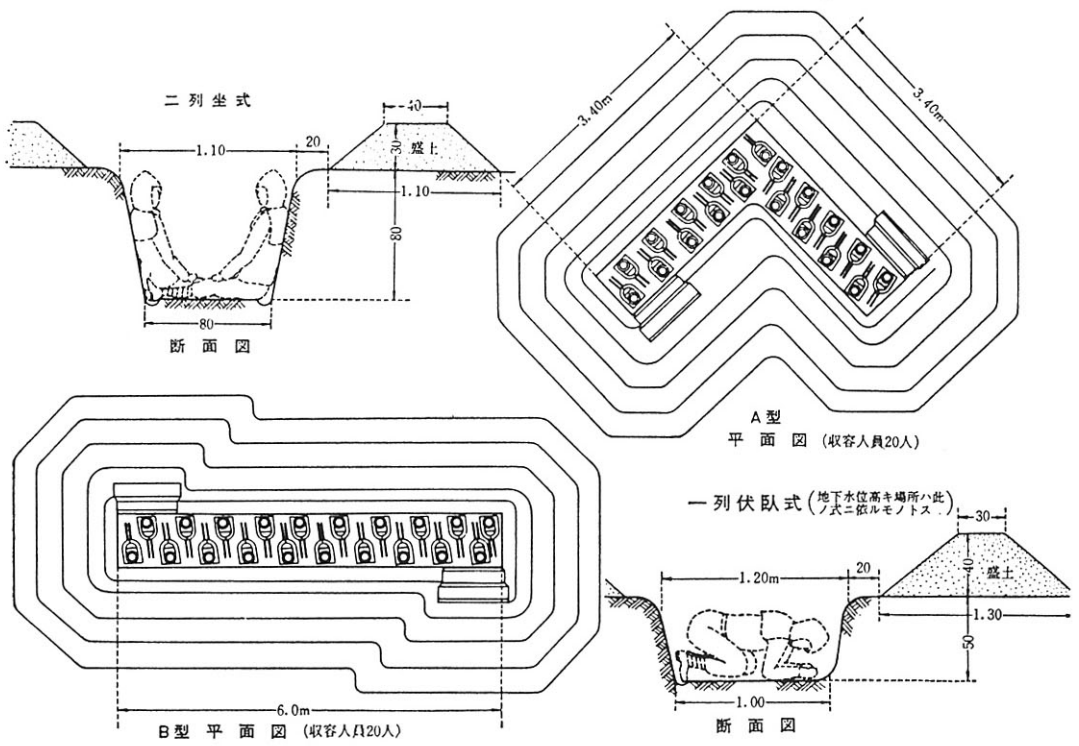
かんで、水はすっかりお湯になっていた。屋敷の庭木も焼け、松の木の幹だけが残っていた。着ている団服もすっかり乾いて、我が家跡へ行って見た。全部木造なので何一つ残っていなかった。警防団で預かっていた防毒マスクは一つもなく、鉄兜だけ五〇個位残っていた。燃える所は全部燃えて。

防空壕に投げ込んだ先祖の位牌を掘って見ると、一〇人も書いてある大きいものが、上のふちの部分が焼けたが名前の部分はよめるようになっていた。なお焼跡に高射砲の炸裂した破片と焼夷弾のケースと銃弾一個、焼けた電話番号札四八四一が見付かった。――戦災の記念――



素堀無掩蓋待避所配置例 (35か所700人収容)

〈「杉並区教育史 下巻」より〉



素堀無掩蓋待避所設計図

〈杉並区教育史 下巻〉より